

目的 ニューヨークやパリでは、オーブンはコンロとほぼ同じ位の率で使われている。彼らの使用理由の中には、「調理や後始末の行程がオーブンの使用によって簡便化されるため」という意識があることがわかった。具体的には、温度や時間の調節が自動的に行われるので手がはなせること、箱型機器のために油煙や油跳ねによる台所の汚れが少ないこと、全員分の料理が一度に作れることなどによる。そしてオーブンの活用が結果として、社会進出した女性たちの家事負担を軽減しているように見受けられる。

一方、日本の主婦の多くは、オーブンを長年、グラタン、肉のロースト、ケーキ、クッキー又は手の込んだ西洋料理などのための調理機器として認識してきた。従ってその使用率はコンロに比べ、極めて少ない。

しかし日本でも、多忙な主婦が増加するにつれ、家事労働が大きな負担となることから、調理に簡便化を求める人が増加している。そこで本来簡便化機器であるオーブンの価値がそうした認識のない日本の主婦にどれだけ受け入れられるかを調査した。

方法 中高年主婦を対象とした講演会、新聞記事、料理教室などでオーブンの日常料理の簡便化機器としての特性を訴求し、調査票調査にて、反応をみた。

結果 主婦の大半は、これまではそれらの特性について認識した経験はなかったが、若い層や簡便化を強く望む層から特に、強い反応があった。